

Ⅲ期（一般・社会人）

平成 31 年度

武蔵野大学大学院 人間社会研究科 人間学専攻 言語聴覚コース 入学試験問題（3月10日）

[小論文]

下の文章を読んだ後、設問に対する小論文を完成させなさい。

<①病気のはじまりほど、ひとを不安にさせるものはない。この頭痛、このはき気、この食欲のなさ、このだるさ、それは、体の中に、ふだんとはっきりちがった、わけのわからない出来事のはじまっているのを告げている。②それは、二、三日の忍耐のうちにとおりすぎてしまうものかも知れないが、どンドンわるくなって、数ヶ月もねていなければならないかも知れないし、完全な健康とは永久に別れなければならないかも知れない。ひよっとしたら、死はとびらのむこう側まで来ているのかもしれない。

すくなくとも医師は、たとえ何も有効な手段をもたなくとも、経験にてらして、病人に、またその家族に、これは単なるカゼであるか、あるいはそうでなくて、どのような病気がはじまろうとしているのかを告げ、その将来を、すなわち、” 予後 ” を、予言することができよう。③それによって病気は病人にも、その周囲の人たちにとっても、顔かたちをもたない怪物から、すくなくとも精神的に対処することのできる客観的なできごとにかわるのである。>

（中井久夫 『日本の医者』 から抜粋。下線は出題者による）

設問：上の文章中の「病気」を「脳卒中」に、「医師」を「セラピスト」に読み替えた上で、特に下線部①～②に依拠しつつ、あなたの考える言語聴覚士のあるべき姿勢（理念）について述べなさい。そして、下線部③の意味するところを解説する形で小論文を閉じてください。（1200字程度）